

## ここに私がおります

イザヤ書6章1-13節

### はじめに

毎月第一主日の礼拝では、その月のテーマに従って説教することになっています。三月のテーマは「奉仕」です。「奉仕」というと、様々なイメージを持たれると思います。教会の活動を支える様々な「教会奉仕」もありますし、社会の活動を支える様々な「社会奉仕」もあります。今日の説教で学びたいことは、「神への奉仕」ということです。私たちクリスチャンは、神様に仕えるがゆえに教会に仕え、神様に仕えるがゆえに社会に仕えるのです。私たちクリスチャンにとって、「教会奉仕」においても「社会奉仕」においても大切なことは、「神への奉仕」として「教会奉仕」をし、「社会奉仕」をするという姿勢だと思うのです。

今日は、預言者イザヤが神様から「奉仕」を委ねられた出来事から、「神への奉仕」に対する姿勢を学びたいと思います。

### 1. 私は唇の汚れた者です

預言者イザヤは、南ユダ王国の「ウジヤ王」が死んだ年に、神様から預言者としての「奉仕」を与えられます。ウジヤ王が死んだのは、紀元前740年頃とされています。ウジヤ王は16歳で王となり、52年間、南ユダ王国を治めます。彼が神様を求めていた間、神様は彼を祝福されました。あらゆる領土に町々を建てて勢力を強め、城壁を強固にし、家畜も農業も盛んにしてくださいました。そして強力な部隊や兵器を与え、彼の名声は遠くにまで広がりました。

しかし彼は、ある時から心が高ぶり、神様の信頼を裏切るようになるのです。祭司にしか許されていなかった神殿で香をたく「奉仕」を、王である自分が行なおうとしたのです。彼は王としての「奉仕」に留まらず、祭司の「奉仕」にまで踏み込もうとしたのです。彼は、心が高ぶり、すべてを支配しようとしたのです。このことが神様の怒りを買ひ、彼はツアラアトという皮膚病に死ぬまで冒されることになるのです。律法では、ツアラアトに冒された者は汚れた者とみなされ、隔離された家に住まなければならないのです。このツアラアトに冒された彼は、王位を退き、死ぬまで隔離された家に住んだのです。

ウジヤ王が南ユダ王国を治めていた52年間は、神様に祝福された時代でした。そのような時代を導いたウジヤ王が死んだ時、南ユダ王国の人々は不安を抱いたことでしょう。この先、この国はどうなっていくのか。アッシリア帝国が勢力を拡大していく中、この国は大丈夫なのか。南ユダ王国は、新しい時代を迎えようとしていたのです。

その時に、預言者イザヤは神殿で神様を見るのです。神様の御前で、「セラフィム」という天

使たちが、「**聖なる、聖なる、聖なる、万軍の主。その栄光は全地に満ちる**」(6:3)という賛美を歌っているのを見聞きするのです。セラフィムは、「聖なる、聖なる、聖なる」と三度繰り返しているように、天使たちは三位一体の主なる神様を賛美していたのです。

すると、神様を自分の目で見たイザヤは、恐怖に包まれてこのように言います。「**ああ、私は滅んでしまう。この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる。しかも、万軍の主である王をこの目で見たのだから**」(6:5)。聖書では、神様を見た者は死ぬと言われています(出エジプト記 33:20)。聖なる神様の御前では、罪ある人間は滅ぶほかないのです。

イザヤは、聖なる神様を前にした時、自分の罪を自覚したのです。キリスト教の救いにおいて、大切なことは自分の罪を自覚することです。自分の罪を自覚しなければ、救われる必要性も感じないでしょう。自分の罪がどれほど深いか、罪の結果がどれほど恐ろしいものなのかを知らなければ、救われることはできません。

罪は、他人と比べても自覚することはできません。他人と比べるだけなら、自分はそれほど悪くない、自分はまだマシと思うだけです。罪は、神様と自分を比べる時に、初めて自覚できるものです。神様の言葉、神様の律法と比べる時、またイエス様の言葉、イエス様の姿と自分を比べる時に、初めて自覚できるものです。イザヤは、「この私は唇の汚れた者で、唇の汚れた民の間に住んでいる」と言っています。アダムとエバが神様の命令に背いた時から、人間はみな罪人です。罪人同士が比べ合っても、所詮、「どんぐりの背比べ」で罪は自覚できません。私たちは、神様と自分を比べてどうなのか、イエス様に比べて自分はどうなのかを問わなければならないのです。

イザヤは、ウジヤ王が死んで、時代が新しくなろうとする時、まず神様を礼拝したのです。イザヤは神殿で神様を礼拝している時に、神様を見るのです。そして神様を前にして自分の罪を自覚するのです。それだけではありません。イザヤは「万軍の主である王を、この目で見た」と言いました。ウジヤ王が死んで、この国はどうなっていくのかという不安がある中、万軍の主こそが「王」であると確信するのです。つまり神様こそが「王」である、神様こそがこの国を守り、導く方であると確信するのです。

私たちも人生の節目で、新しい歩みを始めます。また何かを失って、新しく歩み出さなければならない時もあります。その時に大切なのは、神様を礼拝することです。そして神様を礼拝する中で、神様こそ私たちの「王」であること、神様こそ私たちを守り、導いてくださる方であることを確信することです。

## **2. あなたの罪は赦された**

さて、聖なる神様の御前で、自分の罪を自覚したイザヤはどうなったのでしょうか。イザヤは、自分は滅ぶほかないと思っていました。確かに、私たちが罪あるままで聖なる神様の御前に出ることはできません。罪あるままで聖なる神様の御前に出れば、私たちは滅ぶほかないのです。

しかしセラフィムがイザヤのもとに来て、「**祭壇の上から火ばさみで取った、燃えさかる炭**」

をイザヤの口に触れさせて、こう言うのです。「**見よ。これがあなたの唇に触れたので、あなたの咎は取り除かれ、あなたの罪も赦された**」。「祭壇から取った炭」とは、動物のいけにえを燃やした炭です。それは、贖いのいけにえであり、イザヤの罪の償いのためにささげられたものです。イザヤの唇にこれが触れる時、イザヤの罪は贖われ、赦されたのです。

旧約時代の罪の贖いは、動物のいけにえによってなされました。新約時代の罪の贖いは、イエス様の十字架によってなされます。イエス様は、私たちの罪を償うために、十字架で死なれました。私たちは、自分の罪を自覚して、イエス様の十字架の償いを受け入れて、イエス様を神の子、救い主と自分の唇で告白する時に、すべての罪が赦され救われるのです。そして、私たちはイエス様の十字架を覚える聖餐式に与り、自分の唇にパンと杯が触れる時、私たちのすべての罪が赦され、救われていることを確信するのです。

私たちは、他人と自分を比べるのではなく、聖なる神様と自分を比べる時、自分の罪を自覚します。罪を自覚する時、私たちは滅ぶほかない存在であることを知ります。しかし神様は、イエス様の十字架の償いを、私たちの唇に差し出してくださいます。私たちはそれを受け入れ、自分の唇でイエス様を神の子、救い主と信じ告白し、洗礼を受け、聖餐式に与っていく時に、すべての罪が赦され、救われるのです。

### **3. 私を遣わしてください**

では私たちクリスチャンは、すべての罪が赦され、救われればそれでよいのでしょうか。8節で神様はこう言われます。「**だれを、わたしは遣わそう。だれが、われわれのために行くだろうか**」。神様は、すべての罪を赦し、救われた人を、御自身の働きのために用いられます。神様は御自身の働きのために、「奉仕」する人を求めておられるのです。

イザヤは、神様の求めに対して、「**ここに私がおります。私を遣わしてください**」と応えます。しかしイザヤが与えられた神様の「奉仕」は、非常に辛く厳しいものでした。9-10節には、このようにあります。「**行って、この民に告げよ。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな』と。この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を固く閉ざせ。彼らはその目を見ることも、耳で聞くことも、心で悟ることも、立ち返って癒されることもないように**」。

イザヤが与えられた「奉仕」は、預言者として神様の御言葉を語ることでした。しかし、イザヤが語ることで多くの人が神様に立ち返って、幸せになるというのではないのです。イザヤは、人々の心を鈍らせ、耳を遠くし、目を閉ざすという役割を与えられたのです。人々は、イザヤが語ることによって、聞くこともなく、悟ることもなく、立ち返って癒されることもないのです。イザヤの言葉は、誰も聞かないし、悟ることもないのです。イザヤが語ることによって、人々が良くなるのではなく、かえって悪くなるのです。イザヤの「奉仕」は、何の成果ももたらさないというのです。

イザヤは自分が与えられた「奉仕」に驚いて、思わず「**主よ、いつまでですか**」と言います。すると神様は、11-13節でこう答えます。「**町々が荒れ果てて住む者がなく、家々にも人がいなくなり、土地も荒れ果てて荒地となる。主が人を遠くに移し、この地に見捨てられた場所が増え**

**るまで。そこには、なお十分の一が残るが、それさえも焼き払われる。しかし、切り倒されたテレピンや樫の木のように、それらの間に切り株が残る。この切り株こそ、聖なる裔。**

イザヤが語り続けても、南ユダ王国の状況はどんどん悪くなります。町や家や土地が荒れ果て、人々は遠くに移されます。状況がどんどん悪くなる中で、語り続けよと言われるのです。状況が良くなることも、働きに成果が出ることもないけれども、語り続けよと言われるのです。イザヤが預言者として活躍する時代、北イスラエル王国はアッシリアに滅ぼされ、捕囚の民となります。その後、南ユダ王国もバビロンに滅ぼされ、捕囚の民となります。これが神の民であるイスラエルの辿る道でした。その中で、イザヤは神様の言葉を語り続けなければなりません。何の成果もない、何の実も結ばない、状況はどんどん悪くなる、その中で神様の御言葉を語り続けるのです。それは、辛く厳しい「奉仕」でした。

しかし唯一の希望がありました。それは、切り倒された「切り株」が残るということです。そしてこの「切り株」から新しい芽が出て来るというものです。これは、イエス様に対する預言だと言われます。イスラエルの民は、自らの罪のゆえに滅ぼされます。しかしわずかに残った切り株から、イエス様がお生まれになるのです。神の子であり、救い主であるイエス様がお生まれになり、私たちのすべての罪を贖い、罪の赦しと救いの道を開き、最後の審判をされるのです。

イザヤはもちろん、自分が生きている間にイエス様の姿を見ることはできませんでした。しかし遠い未来に希望を持ち、辛く厳しい「奉仕」を続けたのです。

## **おわりに**

神様は、イエス様の十字架によって罪を赦し、救われた私たちに「奉仕」を与えられます。神様は、御自身の働きのために、「奉仕」する人を求めておられます。それは、「教会奉仕」や「社会奉仕」もそうですが、あらゆる「仕事」や「家庭の形成」も、広い意味では「神様への奉仕」です。神様のために、私たちは仕事をし、家庭を形成するのです。

そこで大切なのは、必ずしも成果を上げることでも、成功することでも、繁栄することでもなく、神様に聞き従うということではないでしょうか。成果が上がるか、成功するか、繁栄するか、それは分からないけれども、とにかく神様に聞き従うということではないでしょうか。それがたとえ辛く厳しい道でも、神様に与えられた道ならば、「ここに私がおります。私を遣わしてください」と言うことではないでしょうか。成果や成功や繁栄に希望を置くのではなく、イエス様だけに希望を置いていくことではないでしょうか。成果や成功や繁栄を目的にするのではなく、神様に聞き従うことこそが私たちの目的ではないでしょうか。成果や成功や繁栄は、目的ではなく、あくまで結果ではないでしょうか。

イエス様の生涯も決して華やかなものではありませんでした。人々からののしられ、見捨てられ、裏切られ、十字架で殺されるというものでした。しかしそれこそが、私たちの罪を償うという神様から与えられた「奉仕」でした。イエス様はただ最後まで、神様に聞き従われたのです。神様は、このイエス様を高く上げられました。それこそが、私たちの希望です。

天におられる私たちの父なる神様。

あなたは聖なる方です。あなたの御前に出る時、私たちは自分がいかに罪深い者であるか、また罪の結果がいかに恐ろしいものであるかを知ります。しかしあなたは私たちを愛し、私たちの罪の贖いのために、イエス様を与えてくださいました。どうか私たちの唇に、イエス様を授けてください。イエス様への信仰告白を授けてくださり、イエス様の贖いのパンと杯を授けてください。そしていよいよ罪の赦しと救いを確信させてください。

あなたは、あなたの働きのための「奉仕」を求めておられます。あなたは、あなたの働きのために人を用いられます。私たちはあなたの求めに対して、いつでも「ここに私がおります。私を遣わしてください」と応えることができますように。たとえ成果や成功や繁栄が約束されていない道でも、ただあなたに聞き従うという目的のために、私たちを用いてください。どうか、それぞれの新しい歩みがある時には、あなたを礼拝し、あなたを「王」として歩めますように。

私たちの救い主、イエス・キリストの御名によってお祈りします。アーメン。